
流石です！えみや様、いい性格しています！

華山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流石です！えみや様、いい性格しています！

【Nコード】

N9357P

【作者名】

華山

【あらすじ】

こんなギャグもどき。

みんなの知っている衛宮 士郎でもなくエミヤ シロウでもなくえみや しろうです。性格を改変にしてこんな衛宮ってどう？と言う感じ。

後半がギャグ。

（前書き）

衛宮士郎は存在しない。

エミヤシロウは哀れ。

えみやしろうは愉快人。

それゆえにセイバーは白い。

どこにでもあります、学生のえみや しろつです。
楽しく学生生活をエンジョイしております。

「すまんが、ストーブを修理してくれ。」

「了解。500円な。」

お金は勿論頂きます。

だって、勿体無いじゃん。こんな技能は将来に役に立つし！。
優等生だと優遇されるんだよね。

「毎回、済まない。」

おっと、忘れてた。

知っている人も知らない人にもご紹介。
目の前に居るのが生徒会長の一成だ。

「それと最近は資金が削られててな。知らんか？。」

はい、うざい！。

訳するにお前が学校の金を糞っているのかって聞いている。
あの校長あとで絞めます。

「問題事が起きたんじゃない？。」

さ、部室に行った後で校長だね。
俺はこれでも、クラブに入っている。お金は在るだけいいに決まっ

ている。

「よっ、会長。気分はいかがですか!。」

こいつは…一応俺の友達の間桐 慎二。

ワカメが特徴だ。別名は負け犬だ。

俺が考えました。

てか、

「会長って何の事だ?。後で頼み事でも聞くか?。」

「す…すみませんでした!!。」

用は脅迫。

なんだよ、其処まで酷い事してないよ?。

してませんよ?。

ゴム弾で虐めるだけなのにどうしてそこまで怯えるのだからね。
後は言葉責めしてねちねちしているわけです。

「ならいいけどな。」

さて、チャイムが鳴ったし早速教室に行って

ホームルームという帰るまでに無駄な時間を過ごすか。

面倒くさくなってきたなあ。

もう、いいや。

ボーっとして置きますか?。

ダダダ…バターン。

ズゴ…。はあ、面倒。

「最近 下」

「はっ、なんだっけ?。」

すぐに立ち上がる担当。

なにこのご都合主義は、耳が良いよな。

藤姉。虎なだけあるよな。

言葉の続きは、下腹が出てきたよな。です。

軽く、見られては困る。解析には自信があるのが俺クオリティ!。

「帰るんじゃないですか?。」

「そうだった!。みんな、最近は何事だから早く帰ってね〜。」

じゃあ、帰りましょう!という掛け声で帰っていった。

俺は、ストーブの修理に頑張る事にする。

生徒会室にそのストーブが置いてある。

壊れたストーブはここに置いてある。

「お仕事お仕事と。」

壊れた部品は作る。

じいさんは不向きだって言われたけど、こんなに便利なのにどうしてさ。

わけわからない。

俺は魔術を使えるだけの一般人だ。

解析だってそれに属し、見るだけで大体は理解できる。

後は十萬位でアレが買える。

改造用のパーツも買わないといけないな。

じいさん、マジで感謝しています。

「これは、寿命だな。」

さて、もう一度 解析 見る。

これは作れない。

うん…外がうるさい。

カバンから鏡を出して外を見る。

なんで、持っているのかって？。

ユーフォーキャッチャーで手に入れました。

桜にあげる予定でしたが。

可愛いらしい桜色の装飾やらで可愛くきれいな鏡。

野郎の俺が持つているのは場違いです。

なんでさ。なぜに遠阪いるんだ？何あの変態な二人は誰。

しかも、銃刀違反してるよ。

まずは、警察に電話しよ。

学校名と用件を伝え、宜しくで切る。

さ、裏門から帰ろ。

そそくさ、遠回りをして逃げる俺。

ばれたら、死ぬな。と呑気に考える。

あの最厄から10年。やつとの10年。

死なんてすぐ其処だった。

ただ歩いて歩いて…死ぬ■■死ぬ死ぬ■ね死ぬ死■。

考えるのをよそう頭が痛くなる。

裏門を通ると

「よお、坊主。」

「うわ、噂の変質者さん。警察のお世話になってください。」

はっ？と返事をされるが無視。

遠くからサイレン音がする。

変態は後ろを見てあせる。

天下の警察だよ、身内に弱い警察だよ。権力は美味しいよの警察です。

隠してあるバイクに乗って逃げる。

「おい！！待っ」

エンジン音で相手の声が聞こえなくなる。

デットライブになりそうだ。

複雑な操作をしながら逃げる。

相手も早い。

「ウーマっているだなっ」と！。

実際に居ると信じられている生き物事だ。

現在の代表がイエティ。

過去の代表がカーバンクル。

間違っているような気がするけど、気にしない！。

エンジンの煙だけでは撃退は無理。

「お前待ちやがれ！！。むしろお前けんぼーいはんじゃねか？！！。」

知るか――。

だったらその赤い長槍を降ろせ！！。

だったら、これだ！。

「なんでだよ――！！！！。」

なにを！バイクにはギミックを、ギミックといえば銃です！。着弾すると爆発する物にしているが悠々と避ける。

うぜー!!。胡椒爆弾でも食らえ!。

「んな、ごぼっ!。」

さ、家へ直送!。

人様の屋根を伝って真っ直ぐと帰るのでした。

当然、まったくのエンジン音がしません。

少しする程度ですがね。帰ると、メンテナンス。

排煙を利用した圧縮銃弾使っていたのですが、蔵で整備。弾丸を詰める。

「イテツ。チェーンが切れたか。」

チェーンを積めてある箱を探るけど、いいのがない。

いてて、また切った。

お目当てのチェーンを見つけて、嵌める。

嵌めようとすると、光った。

「サーヴァント セイバー召喚に応じ参上した。問おう、そなたが……わたしのマスターか。」

また、携帯を出す。

面倒だ。こんなに変質者に会うなんて事は。

「マスター何している。」

「警察に電話。」

黒い、お人形な人に睨まれる。
なんです。

「わたしは怪しい者ではない。」

はつきりと告げる。

ならばと、電話をするのをやめる。

話の内容によってはやばくなると思った。

「ラインは、あるか。ならば」

なにが起きるのがわからない。

どうなって居るんだ。

この状況に着いていけない。

「我が剣はそなたと共に在り、そなたの運命はわたしと共にある。
この剣に誓い、そなたを守ります。」

どうなっているのやら。

「よう。」

「変態タイツは帰れ。」

そういうと固まっていた。

なんだこいつは、困ったさんだな。

「たしかにな。」

頂垂れていた。

同情なんてしない。できるわけもない。

セイバー？がタイツにつっこむ。

黒い聖剣を携えて、向かう。

なぜに聖剣だと思うのかわからない。

でも、相手の筋肉のつき方はどうなっている。

セイバーのつき方もどうかしている。

相手は力に体格が勝っている。

セイバーも同じぐらいの力と技術が上だ。

「どうなっている？。」

どちらにしろ、魔術師の本分だったらしい。

厄介事はお困りですけど、やらないと死ぬな。

「追撃プログラムスタート。消しにかかれ、攻めのツルギ！」

避けるのを避けさせてやるよ。

ためてある、ツルギを追撃に使用。

及び盾のツルギを始動。

「やつかいだな！」

「なぜ、こんな事ができるのやら。」

剣と槍が打ち合う、攻める、防ぐ、弾く。

なんだよ。この高レベルの戦いは！理解を超える。

ツルギが尽きた。

なんで、こんな事になったんだよ。

「さぞ、立派な英雄なのだな。」

「言っとけ。俺たちは立派なわけがないだろ。」

赤い槍をセイバーに向ける。
不敵な笑みでどことなく血管が浮いている。
怖い。

ワインレットのシャツにネクタイは緩めで金のネックレス。
上着も、ズボンも黒。

あ、いけるかも知んない。

セイバーは、シンプルロリッシュが似合うな。
胸とか少ないし。いけるな。

黒か赤がいい。あの白い肌に似合うだろう。
解析魔眼は便利だ。

普段は意識なく使っているから、苦勞もしない。

「駄犬は駄犬らしく行動すれば良いものの。」

「おめえ、言ったな?。」

赤い槍が、禍々しい赤い魔力が溢れる。
よくわかる。

セイバー、逆鱗に触れたな。

「手向けだ。ゲイ・ボルク!！」

セイバーの肩を貫通する。

ふんと、堂々と立っていた。その姿は、騎士に見える。

「気が済みましたか。」

ちっと、声が響く。沈黙が走る。

なんだよコレは、セイバーは何か知っているのかみたいな素振りだ

った。

相手がため息が吐く。

「へいへい。駄犬らしく行動しますよ。」

走っていった。早いなあ。

蒼い残像が残っているぐらいに、早い。すごい。

セイバーが、俺の方を向く。

「で、聖杯戦争を知っているか？。警察に電話するなんて馬鹿（一般人）のすることだが。」

「なにそれ。」

いうとやっぱりかと、言う素振りをされた。いや、状況に着いて行けないっす。

「なによこれ。」

あ、言うまでもなく庭には凸凹が出来ている。

俺の性です！あはは。

とりあえず。

「遠阪、なんでここに居のさ。お茶なら出すけど。」

たしか、蔵に冷蔵庫とポットが置いてあるんだ。それを取りに行く。

「衛宮君って魔術師だったのね？。」

あれ？優等生でマドンナ上等な遠阪凜。
敬語はどうかした。

お隣さんもあれ？という感じに庭を見る。

「学校の変態さん、どうかしたの。」

いうと拳をにぎり、にこやかにしていた。
む。やばいな。

逃げた方がいいのかな。

この怒り方、桜に似てる気がする。
にこやかなところが特に似ている。

「あんた。どついう事なのよ！」

「凜、落ち着け。まず、庭の惨状をみて頭を冷やせ。」

漫才なのか解らないが、うざいな。
よし。

「今のところまではっ」

「よし、クリティカルヒット。」

人を引いてみました。大丈夫かな！。
俺も笑ってみた。引いてるよ。

うわ、その顔って素敵よ！。

「うにゃーおにやら何をやっとする。」

生物色物の猫、うちのマスコット。

「ネコアルク。黙れ。」

「さーсенでした!。」

遠阪凜は思った。

えみや しろうは逆らってはいけないと。

黙れと言った時の眼は恐ろしい眼であった。

アーチャーは驚いた。

なぜだ。

衛宮 士郎ではない。こいつはなんだ。

そして、早く降りてくれ。

重い。

セイバーは嬉しかった。

衛宮 士郎は最高のパートナーになると。

知っているだろうか、衛宮 士郎だったら切り伏せされる所だったのを。

しかも、彼女はどこかの平行世界の黒セイバー、オルターセイバーである事を。

役者は変わり、歯車が動く。

運命を変える戦争が始まる。

そして、この話の言葉で遠阪 凜は吹いた。
なるほどと、サーヴァント側は納得した。

「ようは、パラレルウォーズって事か。」

「はい!?。」

(たしかにな。)

「その通りですね。」

マーボ―神父では

「喜べ、君の願いが叶う。」

「どの願いが?。」

「気のせいだ。気にするな。」

大丈夫かと心底で心配していた。

白い少女は

「わたしはイリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言うの。」

「

「美女と野獣コンビか。」

「はい?。」

「いや。美少女と野獣か。」

うれしかったのは言うまでもない。

お友達は

「慎二、どうなりたい？。」

「すみません、すみません、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。」

「ほう、きれいな90度だな。」

「すみません、すみません、マジで調子に乗りました。申し訳御座いません。」

「許すか。」

「ギャン。」

「踏み心地は良し。」

真面目に可愛そうであった。

そんな感じの聖杯戦争。

パラレルウォーズが始まる。

地味にネコアルクも活躍する。
続かない。

（後書き）

衛宮士郎は正義の味方を目指す。

エミヤシロウは自分を殺す事を目指す。

えみやしろうは普通に近くて遠い自身の将来を目指す。
こんな感じです。

前書きのセイバーは、肌が白いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9357p/>

流石です！えみや様、いい性格しています！

2011年1月9日06時08分発行